四　「新出の『大乗寺文書』の翻刻と解題―大乗寺客殿障壁画における新知見を中心に―」

太田　梨紗子

はじめに

兵庫県香住にある高野山真言宗の亀居山大乗寺は、江戸時代中期に円山応挙（一七三三―一七九五）とその一門が客殿に障壁画を制作したことでよく知られている。さらに、大乗寺には障壁画以外にも屏風や衝立といった数々の絵画作品や円山派との関係を示す文書が今日まで伝わっている。大乗寺文書については『国華』第九四五号で河野元昭氏が詳細に紹介されている。[1] また、客殿に隣接する建物が解体された際に襖の下貼から相当数の文書断簡が発見され、その資料を佐々木丞平氏が『国華』第一二〇五号において紹介された。[2] これらの文書は書き手が分かるものから筆者不詳のもの、明確に絵画作品について記したものから断片的で意味内容のとれないものまで非常に多岐に亘るが、大乗寺再建の沿革や円山派一門の実態を明らかにする貴重な手がかりとなっている。

本稿は、二〇一八年十月十三日から十五日にかけて香美町教育委員会及び神戸大学が大乗寺の協力を得て実施した三日間の調査において、筆者が見出した大乗寺再建及び円山派に関する計十二点の資料の翻刻並びにその考察を試みるものである。なお、十二点のうち十一点までは佐々木氏が紹介された下貼資料群と同様のものであるが、残り一点の書状は大乗寺伝来の大般若経に挟み込まれていた。

一、大乗寺の再建について

大乗寺の再建に関しては、佐々木氏が発見された証文によって天明六（一七八六）年七月に正式に再建が始められたことが明らかになっている。[3] 証文は宗門奉行處に提出するための案文か控えと考えられ、大乗寺が無住であったこと、密英上人（一七五三―一八〇二）が再建に乗り出したことが佐々木氏の資料紹介により判明した。今回の新出資料①はその後の再建活動の過程を示す内容となっている。「口上之覚」とあることから、資料①もまた宗門奉行處へ願い出た内容の案文か控えであろう。筆跡からも密英上人のものと分かる。文意をくみ取ると、去年大乗寺再建の許可がおり、再建を始めるにあたって来年の正月から十二月にかけて所有林の松を伐採したいと密英上人が申し出ている。天明七年十二月と日付があることからも、これが前出の証文に連なる資料であることが分かる。木下知威氏は、大乗寺客殿は棟札から寛政六（一七九四）年三月十六日に豊岡の彦四郎を後見に但馬地方の大工らによって建造が始まっていることが分かるが、この時の建設が新たに客殿を立て直したということを指すのか、天明六年からの密英上人の造営活動に続く行為を指すのか、あるいはその両方といった三つの可能性を提示している。[4] 佐々木氏が言及しているように、無住とあることから建物自体は存在していたと考えられるため、松木五十本もの伐採は新たに土地を切り開くためというよりは、建築資材の調達のためだとみなせるのではないだろうか。[5] そうなると、再建活動が本格的に始まった時期は寛政年間に入ってからであり、再建が何度も繰り返されたとは考えにくい。天明八年の大火による襖絵制作の遅れも考慮すると、寛政六年の客殿の再建は密英上人の造営活動に連なるものであり、荒廃した建物の再建とみなすのが自然だろう。

また、新出資料⑤～⑨は図面資料であり、記されている間取りや襖の枚数等は河野氏によって紹介されている古図と比較するとおおむね合致するものの、

食い違う点も存在する。[6] 例えば、資料⑨（e-2）の「内佛」周辺の間取りと、古図の「内佛」周辺の間取りは明らかに違っているし、資料⑤（a）の「寝蔵奥部屋」も、古図の「寝蔵奥部屋」と様子が異なる（資料⑤（a）は二階の間取りを指す可能性もある）。古図の制作時期は木下氏によって天明七年八月以前の制作とされているのに対して、これら図面資料の書かれた時期は詳らかではない。[7] しかし、資料⑨（e-1）には「此分去冬／出来／先生画／行山水」とある。山水の間の完成時期は天明七年十二月なので、この図面に関しては天明八年一月以降に書かれたものでほぼ間違いない。前述したように、客殿の再建が寛政期に入るのであれば、走り書きで筆者を密英上人と特定出来かねるものの、これらの図面は再建にあたっての間取りの案か控えのようなものではないだろうか。

なお、存在だけが伝えられる応挙筆の二十五畳の雪の間だが、前住職の長谷部琢道上人による『大乗寺歴代記備忘』の記述や古図と比較して資料⑨（e-2）の「東坡雪中　出来」とある間がその部屋であった可能性が高い。[8]

二、客殿障壁画制作について

大乗寺の客殿障壁画はおおまかに分けると天明七年から八年にかけて、そして寛政七年の二度にわたって制作された。今回の新出資料②と、おそらく資料⑨は天明の大火以後に寛政期の障壁画について書き記されたものである。資料②は「新調　襖衝立／二枚折屏風／附画牋紙代銀」と最初に題されていることやその内容から、新しく襖絵と屏風を注文した際の覚書と考えられる。[9] 資料②をみていくと、「玉臺方二而焼失之由承之／候故各為料今般指上之候」とある。そのすぐ左に天明の大火で焼失し描き直された孔雀の間を指す「佛前間」の画牋紙代が記されており、「玉臺」が天皇のいる京都を意味していると考えられるため、この一文は天明の大火で制作中の障壁画が焼失したことを知り、新たに描き直すための画料を渡す旨を示していると読み取ることができる。[10] さらに、既出の大乗寺文書に「一　銀百目／右ハ二間分畫牋紙幷裏打仕有之候處／類焼仕候ニ付以御思召被遣候段承度仕候／尚皆出來之上二遍目書付可入御覧候」と記された円山応瑞（一七六六―一八二九）の金銭授受についての覚書がある[11]（以下この覚書を紹介時の通し番号から覚（五）と呼称する）。この覚（五）に記された類焼を河野氏は天明の大火ではないと否定したが、後に佐々木氏が新たに発見された文書をもとに天明の大火を指すことを明らかにしている。[12] さらに、覚（五）に記された金額部分を引用抜粋する。

一　銀五枚／一　同貳枚／一　同三拾匁／已上　主水江被下候條／一　銀百目／右ハ二間分畫牋紙幷裏打仕有之候處／類焼仕候ニ付以御思召被遣候段承度仕候／尚皆出來之上二遍目書付可入御覧候／一　四十四匁　後學文所／紙代／一　六拾匁衝立兩面紙／金箔代之内渡／一　同　右近相認衝立／　二枚折畫料／一　十六匁　同紙代／六百十壹匁／一　六百目　藤五郎／一　小包壹　藤竹郎／一　九拾匁　呉氏／一　五十三匁　同紙代／一　六拾匁　駒井／一　四拾匁　同紙代／一　九拾匁　長澤／一　五拾匁／紙代／一　十五匁　扇箱代／〆九百九十八匁／外ニ小包壹ッ

（河野元昭「大乗寺円山派関係文書」より覚（五）、『国華』第九四五号、七七頁）

この金額と資料②に記された金額を見比べると、値がほぼ一致する。さらに資料②には絵師の名前だけでなく、源琦（一七四七―一七九七）の鴨の間、長沢芦雪（一七五四―一七九九）の猿の間であろう「源琦」「老梅鴛鴦ノ間」、「芦雪」「四季海邊猿」と画題も記載されていることから、覚（五）の画料が障壁画のものであることが確定し、同時に注文がなされたことが分かる。障壁画だけでなく、「〇同　三十目　應瑞々々／衝立一面　鶏一番ひ」は現在も大乗寺に伝わる応瑞筆「鶏図」衝立（紙本金地着色）、おそらく「白張二枚折一双／〇同三十目　正勤々々」、「〇十六匁　正勤／同二枚折一双分四枚代」も源正勤筆「子猷訪戴図」「帰去来図」（紙本着色・大乗寺蔵）のことを指しており、寛政期の大乗寺障壁画と併せて注文されていたことが分かる。[13] 学文所の紙代四十四匁は、「四季墨画竹」

の画牋紙十三枚代に違いない。この「四季墨画竹」は現在行方不明になっている竹の間の障壁画のことだろう。田島志編『真美大観』第十四巻（日本真美協会、明治四〇〔一九〇一〕年）に「寛政五年初秋の作に係る竹之間等の障壁画あり」とあり、これはおそらく落款から記述したと考えられる。このことから、資料②の書かれた時期は文面から天明大火直後だと考えられるが、下限としては寛政五年初秋以前とみなせる。

さらに、この新出資料②では特筆すべき点が二つある。まず一つ目は芭蕉の間についてである。覚（五）には二間分の襖絵が裏打まで施されていたが焼失してしまい、その代金として銀百目を受け取ったので二度目を描くと記されている。佐々木氏はこれを孔雀の間であるとした上で、応挙の書簡とその絵画様式から芭蕉の間をこの二間分に含まず、天明八年一月の完成と推定している。[14] しかし、資料②を見てみると、画牋紙代の百目の下に「佛前間」に並んで「次ノ間」も記されている。「次ノ間」は資料⑨（e-1）を見ても分かるとおり、芭蕉の間を意味している。さらに資料⑨（e-1）には「此分去冬／出来／先生画／行山水」、「此間／呉春子／山水出来」とあるのに対して、孔雀の間、次の間には「出来」という文字は表れていない。山水の間の襖絵が送られた後、芭蕉の間の襖絵が送られる前に書かれたとも考えられるが、資料②の内容と合わせるとその可能性は低い。では、絵画様式の問題となるが、大乗寺の「郭子儀図」には同一図様の粉本と作品があり、応挙と所縁の深い植松家に伝わっていた。[15] 特に粉本は郭子儀だけでなく芭蕉の葉に書きものをする童子や扇を持つ童子の図様も残されており、これらは芭蕉の間襖絵の図様と一致する。佐々木氏は、「郭子儀図」粉本の制作時期を天明八年制作の金剛寺所蔵「群仙図」との墨線の類似からその前後の時期と推定している。[16] その上で、大乗寺の芭蕉の間襖絵も同一年代によるものだと結論付けているが、それに対して植松家旧蔵の応挙筆「郭子儀図」（現・東京国立博物館所蔵）は衣の色等微細な違いはあるものの、非常に近似した形態を示し、やや時代の下る寛政四年の制作である。粉本の性質を考えると、整理された墨線は固定化した結果であり、形式化した図様についてその様式から制作年代を詳細に特定するのは難しいのではないだろうか。先述のとおり、「郭子儀図」だけでなく唐子の粉本も現存し、さらに資料から芭蕉の間全体の粉本が存在したことが考えられる。そのため、芭蕉の間は形式化した図様であり、制作時期が現在唱えられている天明八年一月から寛政期へと下ってもおかしくない。そうなると、芭蕉の間が再度描き直されたものだとして、制作された時期はいつなのかという問題が生じる。資料③の「先生画料」には「孔雀間」と、おそらく竹の間を表す「緑筠亭」、大乗寺に現存しない「廊衝立」しか記されていないため、少なくともこれらの作品とは時期が異なるとしか現状では言及しえない。[17]

次に注視すべき点は、農業の間についてである。現在は呉春（一七五二―一八一一）筆「四季耕作図」の襖絵がはめられているが、天明七年のものと推定される既出の大乗寺文書に、「御襖花鳥之畫相認候」「嶋田主計頭　元直（白文方印）」とあり、佐々木氏はこの嶋田元直（一七三五―一八一九）の花鳥画が呉春の農業の間にあたる襖絵であったと推定している。[18] 新出資料②には「〇同百弐目　月渓丶丶／四季艸花　大玄関見附／或ハ　唐耕作　七ツホ」とあり、「月渓」「大玄関見附」「唐耕作」からこれが現在の農業の間を指していることは明らかである。しかし、「唐耕作」は「大玄関見附」の「四季艸花」に対する別の選択肢として提示されている。元来は元直の花鳥画がはまっていたとすると、「玄関見附」の襖絵は再度注文され、且つ画題が以前と似た主題で迷われていたことがこの資料から分かる。何故元直から変更されたかはこの資料から読み取ることは出来ないが、結果として群山露頂の間を描いた呉春に再び白羽の矢が立ったことは興味深い。

最後に、木下応受（一七七七―一八一五）筆「遊亀図」について簡単に言及しておきたい。新出の図面資料⑦（c-1）には壁面絵画を表した図と共に「方丈小壁／水亀／社中寄合画」と記されている。現在の障壁画群に寄合画の「水亀」図は存在しないが、応受筆の「遊亀図」は伝わっている。さらにこの「遊亀図」は実際に方丈に位置していることから、寄合画から応受一人が描くことに変更

されたのだろう。以上をふまえると、大乗寺障壁画、並びに客殿の再建は最初から確定した計画のもと進められていたというよりは、試行錯誤を繰り返しながら行われていたことが今回の新出資料群から読みとれる。

三、円山派一門について

第一章、第二章では大乗寺再建や大乗寺客殿障壁画を主軸として考察してきたが、本章では新出資料から判明した円山派の実態の一様相について考察する。資料②には「○同　弐十目　蘭斉々々」、資料②には「○十六匁　蘭斉／白張二枚折一双四枚代」と「蘭斉」という絵師にも絵画の注文がされていたことが分かる。この「蘭斉」は、円山派名簿と目される大乗寺文書に載る「岸雅楽助蘭斎」に間違いないだろう。[19] つまりは岸駒（？〔一七四九、一七五六〕―一八三八）のことである。他の大乗寺文書にも「一　銀三十匁　岸雅楽助分」と記されているものが存在すること、岸駒と応挙合作の作品があることから、佐々木氏は岸駒が応挙一門の画家であったとみなしている。[20] 新出資料②では岸駒が応挙やその弟子である源琦や芦雪、応挙の子である応瑞たちと名を連ねている。これは佐々木氏が提唱する岸駒が円山派一門であったという説を補強する重要な証拠の一つとなるだろう。

ところで、朝岡興禎（一八〇〇―一八五六）著『古画備考』の原在中（一七五〇―一八三七）の項には、応挙の没後に応挙の弟子ではないとうそぶく原在中に岸駒が怒り、応瑞に門人帳を見せてもらったところ、入門の名簿に在中の名前が載っていたという逸話が記載されている。このような話が伝わっているにも関わらず、在中が応挙の弟子であるかどうかは現状では解明できていない。寛政期御所造営の願書には在中は「円山主水弟子」とあり、大乗寺文書の円山派名簿にも原在中の名は載っている。[21] しかし、在中の師に関しては応挙の他に鶴澤派の石田幽汀（一七二一―一七八六）とする説も存在する。[22] こちらの説が強調され、応挙とは幽汀門下の間柄で一時兄弟子の応挙についたとされることもあって、現在では幽汀説、応挙説、幽汀と応挙の折衷説の三つが唱えられている。しかし、今回の新出資料④には「三尺屏風唐紙　白張　五雙／月渓　山本　在中　芦雪　右近」と、三尺屏風五雙の絵師の一人に在中の名前があり、その上呉春、山本守礼（一七五一―一七九〇）、芦雪、応瑞を指す右近と共に名を連ねている。さらには「二枚折　社中　寄合　画／□田　應擧　二人瑞　芦雪　月渓／雪亭　守禮　源琦　在中　中村」と、応挙も筆を執った円山派社中寄合画に在中が主要な弟子たちに交じって加わっている。これは在中が円山派社中の一人であったという確実な証拠ではないだろうか。この資料③自体の書かれた時期は分からず、大乗寺による注文時の記録か、後の所蔵作品に関する記録の可能性もあるが、いずれにせよ、在中の名前が社中寄合画の記録にあることは重要であろう。岸駒と在中が社同門であったとすると、先述の『古画備考』の話が現実味を帯びはじめる。本当にこの喧嘩は起きていたのかもしれない。

他にも記録の上ではあまり確認されていない弟子の名前も新出資料には散見するが、新出の名前である「鶴皐」にだけ少し触れておきたい。資料②に登場する「鶴皐」という絵師は、管見の限りでは円山派の弟子の中にはおらず、同じ名を持つ同時代で高名な人物としては世古鶴皐（？―一八一三―？）を挙げることができるのみである。この世古鶴皐は文化十年（一八一三）十月版の『平安人物志』に掲載され、常栖寺の襖絵に「蛇足画苗」「蛇足翁十一世」とあることから、曽我蛇足への憧れや蛇足十世を名乗る蕭白の受容が看取できる。[23] 絵画様式からも、円山派と関わりを持っていたとは考えにくいが、今後の研究に期待したい。なお、岡田秀之氏からは、応挙の有力な弟子である山跡鶴嶺（生没年未詳）の子や門人といった鶴嶺周縁の人物である可能性についてご示唆いただいた。[24] 嶺と皐という対になったような字義だけをみても、その可能性の方が高いように思われる。

四、和田久左衛門から大乗寺への手紙

本章では、経典から発見された新出資料④・書状一通の解釈と差出人である和田久左衛門について考察を行う。和田久左衛門を主語において④の書状の内容を箇条書きでかいつまんで記すと以下のようになる。

- 十四日（書状の日付と同じ十月か）に書状が届き読んだこと。
- 体調が万全になったので安心してほしいこと。
- 廣岡氏が高野山への登山をとどまったので、旅宿石川屋まで尋ねたが、未だに便りがないこと。
- 円山兄弟が彦根に御画用があり逗留中であるのを承知していること。
- （大乗寺から）銀李一袋、海苔一袋を送られ、いつもながらのことで感謝し、早速いただいたこと。
- 廣岡氏にも伝言を送ってほしいこと。

といった内容が記されている。この書状一通では内容の全貌を推し量ることは難しいが、円山兄弟はおそらく応瑞、応受のことを指しているに違いない。彦根に御画用とあるのが具体的に誰の注文か、あるいは何の作品を指すのか、もしくは画技の伝授等の仕事なのかはここからでは判断できないが、逗留が必要な程度ではあったのだろう。銀李という単語は耳慣れず銀杏の誤記である可能性もあるが、賞味とあるため、食物を指していると思われる。廣岡氏については後述する。この書状の差出人の和田久左衛門は大乗寺と頻繁に書状や贈り物を届けあう仲だったらしい。この人物は一体誰なのだろうか。ここではその候補の一人として、大坂の豪商・和田隆侯（一七四八―一八〇三）を挙げておきたい。和田家は代々辰巳屋久左衛門を名乗り、鴻池善右衛門や住友吉左衛門に並ぶ財力を有していた。この辰巳屋は歌舞伎、浄瑠璃の題材にもなった「辰巳屋一件」という役人をも巻き込んだ御家騒動でもよく知られている。[25] そして、円山派との関係においては、木村重圭氏が応挙門下の上田耕夫（一七六〇―一八三二）のパトロンとして隆侯を紹介されている。[26] 上田耕夫は現在ではあまり名の知られた絵師ではないが、木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）や上田秋成（一七三四―一八〇九）、村瀬栲亭（一七四四―一八一八）に皆川淇園（一七三四―一八〇七）と錚々たる人物たちと交流を結んでいた。耕夫は文政五（一八二二）年版『平安人物志』までは少なくとも京都におり、後年大坂に居を移すが、隆侯の没年を考えると大坂だけでなく京都での交流も盛んに行っていたのだろう。年代が明確な交流として、応挙とも交遊のある皆川淇園著『皆川淇園文集』には寛政六年正月に隆侯が耕夫に谷文晁筆「公余深勝図巻」（寛政五年、東京国立博物館蔵）を模写させたこと、寛政七年四月には隆侯が耕夫を従えて金沢に行き、「海浜奇勝図」を描かせたことが記されている。[27] この年代ならば応挙はまだ存命であり、大乗寺の寛政期の襖絵制作も行われている。耕夫と親密な関係をもっていた隆侯が、その師であり、淇園とも共通の知り合いであった応挙とも交流していた可能性は十分に考えられる。また、近代のことになるが、和田家は応挙と縁の深い新町三井家の九代目当主・高堅（一八六七―一九四五）の弟を養子としている。[28] 隆侯のパトロンとしての財力、京都での交流や耕夫との関係を踏まえると、大乗寺への書状の差出人、和田久左衛門がこの和田隆侯であるとしても不思議ではない。そうであるならば、書状に登場する廣岡氏はおそらく隆侯と同じ大坂の豪商、加島屋の広岡久右衛門の可能性がある。大乗寺との交際に関しても、『大乗寺歴代記備忘』では密英上人が再建事業の性質上京都へ行く際は諸方面と交際を行っていたと記録されており、彼等が大乗寺へ援助を行っていたことも考えられる。また、調査報告後、大乗寺・副住職・山岨眞應氏から「浪花タツミヤヨリ到来器／寛政三辛亥九月十七□日／京都圓山應擧ヨリ／亀居山密英心城被／恵之」と箱書に記された玉盃の存在をご教示頂いた。この三人の交流を確かなものとする重要な傍証である。

応挙と大坂商人とのつながりについては、安岡重明氏が先に名を挙げた鴻池家による応挙作品の購入を指摘している。[29] 安岡氏は鴻池家の「算用帳」支出科目に応挙作品が記されていることを明らかにしているものの、記されはじめる時期が応挙の死後年数を経てからであり、親しい交際はなかったとしている。

しかし、円山家への援助者の研究としては、今まで寺社や皇族公家、三井家がその位置を大きく占めていた。兼葭堂をはじめとする大坂の文化人と応挙の交流や今回の推察を鑑みると、大坂の豪商たちとの関係もこれからの研究で取り上げられるべき課題の一つであろう。[30]

結びにかえて

以上、翻刻した新出資料をめぐって筆者に可能な範囲で考察を加えたが、こぼれ落ちたものも多く、これらの資料から読み取るべきことは未だに多く残されている。資料の筆者の同定など、考察の内容自体も万全とは言いがたいが、大乗寺研究並びに円山派研究のささやかな一助となれば幸いである。また、断片資料で本稿ではここまで触れてこなかったが、新出資料⑩は資料②にあるような「飯糧」が実際に応挙に贈られていたことを示し、新出資料⑪は「圓山主水」からの書状の包み紙と思われるため、翻刻を施した。

最後に、吉川家に伝わる応瑞筆「応挙寿像」の図の紹介をもって、本稿を締めくくることとする。吉川家はかねてから円山派の大乗寺障壁画についての文書を所蔵していることで知られている。本図の箱裏に「維岀大正元年八月」とある点や、画絹の損傷度合いからみて、大正元（一九一二）年に軸装に仕立てたと考えられる。それまでは「まくり」の状態であったのではないだろうか。現在応挙の肖像画としては、有名なもので山跡鶴嶺によるもの、「近世名家肖像図巻」に載る伝谷文晁筆のもの、張月樵筆の大雅、蕪村と並ぶ三幅対のうち一幅等が数えられる。本図の画面をみると、「源應擧壽像」「督子應瑞」とある。印もなく、墨書の筆跡も応瑞によるものだとは断定しかねる。ただ、箱表には「應擧壽像應瑞筆」とあり、薄い朱隈の使用など、応挙筆の肖像画と一致する描法が使用されていることから、絵画自体は応瑞によるものである可能性が高い。[31] また、応挙が裃に帯刀姿で表され、扇子を膝前に置くかしこまった態勢でいること、「源應擧寿像」とあることから、おそらく本図は応挙の慶事の際に配られたものではないだろうか。慶事であれば応挙の寿像である可能性が高い。鶴嶺筆の肖像画と比べると、顔貌表現がより写実的になっている。裃の家紋が鶴嶺筆は「五七桐」であるのに対して応瑞筆は「丸に立ち沢瀉」と異なっているのが興味深いが、両者とも珍しい家紋ではないため、この違いに直ちに意味を求めることは難しい。[32] また、刀の数が減って脇に置く左右も変わっている。ここでは画面の現状を記すにとどまるが、これまで紹介のなかった本図のように、応挙やその一門には未だ明らかになっていない顔がいくつもあるのだろう。

[附記]

本稿を執筆するにあたり、大乗寺副住職・山岨眞應氏、吉川正人氏、香美町教育委員会生涯学習課・石松崇氏から多くのご高配をいただきました。また、嵯峨嵐山文華館学芸課長・岡田秀之氏には解題について、大津市歴史博物館学芸員・横谷賢一郎氏には上田耕夫についてご教示いただきました。翻刻に際しては共に今回の調査を行った神戸大学大学院人文学研究科・石橋知之氏をはじめとする神戸大学日本史学研究室の皆様にご協力たまわりました。また東京大学大学院・竹崎宏基氏に多くのご助言、ご助力をたまわりました。

末筆ながら記し皆様に深謝いたします。

本稿は平成三十年度香美町教育委員会による大乗寺文化財悉皆調査の成果の一部であり、神戸大学美術史学研究室『美術史論集』第十九号掲載分に修正を加えたものである。

注

1 河野元昭「大乗寺圓山派関係文書」『國華』第九四五号、七四―八〇頁、一九七二年。

2 佐々木丞平「圓山応挙と大乗寺―新出文書を手がかりとして―」『國華』第一二〇五号、三―十八頁、一九九六年。

3 註二前掲佐々木論文。

4 木下知威「亀居山大乗寺客殿の天明・寛政期における再建と修繕過程に関する研究障壁画注文及び製作年との関連性も含めて」『日本建築学会計画系論文集』第六七二号、四二七―四三六頁。

5 註二前掲佐々木論文。

6 註一前掲河野論文。

7 註四前掲木下論文。

8 「但しこれ現存の部分にして、上人建立當時は更に五分の一を加ふ、即ち現今の竹の間面蔵を取り入れて更に東に六間に六間の突出部あり其中に廿五畳平間（雪ノ間）七畳半上段、付の書院、一間を始め寝蔵（牡丹間）十二畳、奥寝蔵（竹ノ間）十畳、（内一坪仏間）、料理間、廊下、等あり応挙筆、竹の間、全牡丹間、全雪の間、と呼びたるなり。」（『大乗寺歴代記備忘』の密英上人の項より抜粋）

9 新出資料②にあたっては竹崎宏基氏に本資料の重要性をご教示いただいた。

10 孔雀の間の焼失については註二佐々木前掲論文、佐々木丞平、佐々木正子『圓山應擧研究』（一九九六年、中央公論美術出版）を参照した。

11 註一河野前掲論文より（五）覚。

12 註一河野前掲論文、註二佐々木前掲論文、註十佐々木前掲書。

13 河野氏、木村氏らによると源正勤は奥文鳴（一七七三―一八一三）である。今回の新出資料によってある程度狭められる「帰去来図」「子猷訪戴図」の制作年代の幅は、寛政期の御所造営の時期と一致し、木村氏の述べるように、文鳴は常御殿にまったく同一の画題を描いていることから両者が同一人物である可能性はさらに強まるのではないだろうか。（河野元昭「大乗寺と円山派作家」〔註一前掲雑誌、三―十一頁〕木村重圭「奥文鳴について」〔『禅文化研究所紀要』第二六号、禅文化研究所、一八一―二一八頁、二〇〇二年〕）

14 註二前掲佐々木論文。

15 新出資料④には「生類　艸花　山水／人物　手本　□比ヵ／已上　擧先生画」とあり、大乗寺にも手本が伝わっていたことが分かる。河野氏、佐々木氏が紹介した大乗寺文書から画法伝授書が大乗寺に送られていることが判明している上、『大乗寺歴代記備忘』には「密英上人は自らも亦繪を能くし詞漢にも巧みなり」とあるため、密英上人は応挙に手ほどきを受けていたのだろう。

16 佐々木丞平「円山応挙関係資料　植松家蔵品を中心にして（下）」『仏教芸術』第八〇号、毎日新聞社、三一―四七頁、一九七一年。

17 可能性の一つとして、芭蕉の間襖絵も応挙・応瑞筆「果賓図」子襖のように、下書きが応挙で彩色が応瑞ということもありえるだろう。河野氏の指摘する吉川家文書では、列挙されている作品の中に芭蕉の間襖絵も登場する。文書中の応挙が下書きで起き上がれなくなり、応瑞が代わりに彩色を施したという一文は、彩色画全てにかかっているとも解釈できるのではないだろうか（註十三河野前掲論文）。

18 註二前掲佐々木論文。

19 註二前掲佐々木論文において円山派の名簿として紹介されている。人名に線が引かれているのは物故者を表しているとされる（『円山応挙展　江戸時代絵画　真の実力者』展覧会図録〔愛知県美術館、二〇一三年〕より深山孝彰氏の解説）。

20 佐々木丞平「岸駒の生涯と芸術」『岸派とその系譜―岸駒から岸竹堂へ―』展覧会図録（栗東歴史民俗博物館、一九九六年）。

21 宮島新一「画流の形成と継承―円山・四条派と原・岸派―」（「花鳥画」『日本屏風絵集成』第八巻、講談社、一九七八年）

22 原在中に関しては、以下の文献を参考にした。松尾勝彦「原在中研究（美術家伝研究）」（『美術史』第三二号、美術史学会、一二一―一二七頁、一九八三年）、佐々木丞平編「文化・文政期」『京都画壇の十九世紀』第二巻（思文閣出版、一九九四年）より冷泉為人氏による原在中の解説、中谷伸生「建仁寺護国院開山堂障壁画（上）：加藤文麗と原在中（平成十五（二〇〇三）年度建仁寺護国院の建築及び障壁画の調査研究報告）」（『関西大学博物館紀要』第十号、関西大学、一四九―一五〇頁、二〇〇四年）。

23 世古鶴皐については以下の文献を参照した。註二二佐々木編前掲書より鈴木幸人氏による世古鶴皐の解説、『京の絵師は百花繚乱』展覧会図録（京都文化博物館、一九九八年）より横谷賢一郎氏による世古鶴皐の解説。

24 山跡鶴嶺に関しては『黒川古文化研究所・研究図録シリーズⅠ　円山応挙の門人たち』

25 展覧会図録（黒川古文化研究所、二〇一四年）を参照した。

26 内山美樹子「辰巳屋一件の虚像と実像―大岡越前守忠相日記・銀の笄・女の舞剣紅楓をめぐって―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第二九号、早稲田大学大学院文学研究科、一六一―一八〇頁、一九八三年）。

27 木村重圭「上田耕夫について（含　上田耕夫年譜）」『塵界』第十六号、兵庫県立歴史博物館、十九―四〇頁、二〇〇五年。他に上田耕夫の主要参考文献として『日本画家　上田耕夫・耕冲・耕甫』展覧会図録（池田市立歴史民俗資料館、一九九四年）、中谷伸生「上田耕夫―呉春・蕪村を慕った大坂の四条派―」（『関西大学東西学術研究創立五十周年記念論文集』、二六一―二七三頁、二〇〇一年）、安道永、藤田勝也、西澤英和「9287 近世京都絵師の居住地とパトロンの関係性について（都市史：日本(2)，建築歴史・意匠）」（『学術講演梗概集・F-2，建築歴史・意匠』一般社団法人日本建築学会、五七三―五七四頁、二〇一一年）等を参照した。なお、上田耕夫の師についてであるが、本稿では木村氏に倣い円山門下としている。しかし、強い連帯意識を持つ弟子というよりかは、応挙の下で学習後、四条派へと傾倒していった人物として木村氏、中谷氏らは捉えている。

28 『皆川淇園文集抄』（藤田経世著『校刊美術史料続篇』第四巻所収、校刊美術史料続篇刊行会、一九八五年）を参照した。また、応挙と淇園の交遊の一例として、「梅渓紀行」（寛政元年、個人蔵）が挙げられる。本稿で挙げた他にも『淇園文集』には和田の名前が登場するため、応挙と和田久左衛門につながりがあっても自然のことのように思われる。

29 応挙と三井家新町家との関係については樋口一貴「新出の円山応挙「三井高彌像」」（『三井文庫論叢』第三二号、三井文庫、一一三―一四〇頁、一九九八年）を、養子関係については文明社『大阪現代人名辞書』第一巻（日本図書センター、二〇〇三年復刻〔底本は一九一三（大正二）年〕）の和田久左衛門の項、三井文庫編『三井家文化人名録』（三井文庫、二〇〇二年）の三井高堅の項を参照した。

30 安岡重明「円山応挙と京都町人」（註二一前掲書）。

31 これはまったくの余談になるが、木村氏は註二十六の論考の中で、隆侯が『兼葭堂日記』に登場しないことから、二人の間に交流がなかったのかと疑問を付している。この疑問に対して一つ興味深い説が存在する。ここで先述した元文四、五年（一七三九、四〇）「辰巳屋一件」のあらすじを簡略にのべると、先代久左衛門に先立たれた辰巳屋は、先代の弟で他家に出された木津屋吉兵衛に家を乗っ取られ、先代の後を継ぐはずだったまだ若い養子は実家に帰ってしまう。手代たちがこれを役人に訴えるが、役人は吉兵衛から賄賂を受け取っており、かえって手代の一人を捕まえる。堪りかねた店子は江戸に訴え、役人は死罪などの罰を受け、吉兵衛は流罪となる。この吉兵衛の娘が、木村兼葭堂と親密な関係であった三好正慶（一七二九―一八〇六）であるという一説があるのだ。あまり信憑性は高くないが、そうだとしたら、正慶は辰巳屋にとって天敵の娘であり、兼葭堂と辰巳屋との交流が見受けられないのも肯ける（林春隆「兼葭堂と正慶尼」〔『上方』創元社、三三一―三三頁、一九四三年〕、中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社、二〇〇〇年）。

32 応挙の肖像画に使用されている描法については註二十八前掲樋口論文を参考にした。家紋について高澤等『家紋の辞典』（東京堂出版、二〇〇八年）、同『名字から引く家紋の辞典』（東京堂出版、二〇一一年）を参考にした。後者の文献では、円山、丸山の項目に「丸に立ち沢瀉」が挙げられている。

新出の「大乗寺文書」翻刻

①

口上之覺

一　去年秋拙寺再建之儀
願之通被　仰附候就夫
於持林之内松木五拾本従
来申正月同十二月迄ニ
伐取申度是亦願之通リ
被　仰附可被下候已上

美含郡森村大乗寺看主
天明七年丁未十二月　心城房
寺社
御奉行處

②

已下画賤岳代銀

○百目　次ノ間　画賤紙代
佛前間
玉臺方二而焼失之由承之
候故各為料今般指上之候

画賤紙弐十枚代

○四十四匁　学文所
四季墨画竹

画賤紙十三枚代
六文

○三十目　源琦
老梅鴛鴦ノ間

同九枚分之■（重書き・紙ヵ）

○六十目　芦雪
四季海邊猿

同十五枚之□

（破損）□

（破損）艸花

［下段］

四季艸花　大玄関見附
或ハ　唐耕作　七ツホ

白張衝立両面人物叩氷煎茶
六　文

○同■（重書き・七ヵ）十三目　源琦々々
四ツホ半　池

但シ七十目歟　老梅○鴛鴦間
五文　書院間

○同百○目　芦雪
七ツホ半　四季海邊猿

○同　弐十目　蘭斉々々
衝立両面

○同三十目　鶴皐々々
白張二枚折一双

○同三十目　正勤々々
同四十目　応瑞々々
金張二枚折　一双
色芍薬睡猫　梢蝉

□籠
〆　七百三十九匁

［ウラ］
金屏　四双
先生　御画室為
飯糧
○墨画昼夜梅小鳥　一双
百五十目
○中彩色虎　一双
百八十匁
幽望
○墨絵早春山水　一双
秋眺望
弐百目
○九鶴中彩色　一双
弐百十五匁

③
新調　襖衝立
二枚折屏風
附画牋紙代銀
先生画料
○銀五枚　孔雀間
弐百十五匁
先生々々
○同弐枚　緑筠亭

四季墨画　竹　常学問所
八十三匁　（上から「文」）
先生々々
○衝銀三十目　廉衝立
（上から同）　一面
○同　三十目　應瑞々々
衝立一面　鶏一番ひ
○同　百弐目　月渓丶丶
［下段］
○五十六匁　月（以下破損）
四季（以下破損）
或ハ唐耕作□
同十四枚分
十六匁
○八匁　鶴皐々々
白張二枚折画ノ紙四枚代
○十六匁　正勤
同二枚折一双分四枚代
○十六匁　應瑞
金張二枚折四枚画牋紙四枚
（上から「一双」）　代
○十六匁　蘭斉
白張二枚折一双四枚代四　四
〆画牋紙代　三百三十八匁
六十匁
○外八百目　銀壱貫八百目
襖引手代　外ニ金屏

并釘隠入銀　四双二枚折一双
衝立両面
三口分壱貫八百九十九匁

④

一　木唐帋―棚　一　金張二枚折屏風
一　金屏―二雙　一　唐紙屏風　二雙
内虎出来　圓山在蔵　一　三尺金屏　二雙
一　高師御影　一幅　一　十界図　一幅
一　麻野図意　但シ　大床物
つゐ立　一面　□　先□浴湯之席
大玄関　裏　月渓　一　内佛間　張附
唐紙張附　一面蓮華
一　生類　艸花鳥　山水　一　十二支
人物　手本　□比ヵ
已上　擧先生画
孔雀
一　つゐ立　裏表　瑞子画
一　同鶏　同断　禮子画
書院間
一がく　天井　板　圓山社中寄合写
佛間　かく天井　板　駒井浴湯
客殿　障子腰板　一　玄関杉戸　十二面
一玄関左椽二枚杉戸　一　書院堺椽杉戸
一内玄関杉戸　四面　一　二階襖十二枚　二間四枚折／四枚両面／四面押込
／ウラナシ
関　間
但シ大玄　家内玄関椽　杉戸二枚
一三尺屏風唐紙　白張　五雙
月渓　山本　在中　芦雪　右近
一長高ヵ唐紙屏風　一雙　嶋田
飲中八仙人　二枚ヵ
一二枚折　社中　寄合　画
□田　應擧　応瑞　芦雪　月渓
雪亭　守禮　源琦　在中　中村

⑤

十四日御紙面相達拝見寒冷
之節弥御壮健被成御座候珍重
御儀奉存候私義毎々御尋被下
忝奉存候最早全快仕候間御安慮
可被下候然者先達而高野
御登山之由御停御座候故此間
廣岡氏出会之節御旅宿石川屋迄
御尋申上候得共末御便無之由
申居候圓山兄弟彦根御画
用彼地逗留之由先達而より
承居候且被寄思召銀李一袋
海苔一袋御投恵毎事御懇
之至千万忝早速賞味可仕候
廣岡氏へも御伝言之趣早速
相達可被下候先者貴答迄如此

御座候尚期後音候以上

十月十七日　　和田久左衛門

大乗寺様

⑪

昆布

上

飯糧一器　　心城拝

應舉　様

⑫

但馬森

大乗寺様

急用書　　圓山主水

茶三袋□

口上之覺

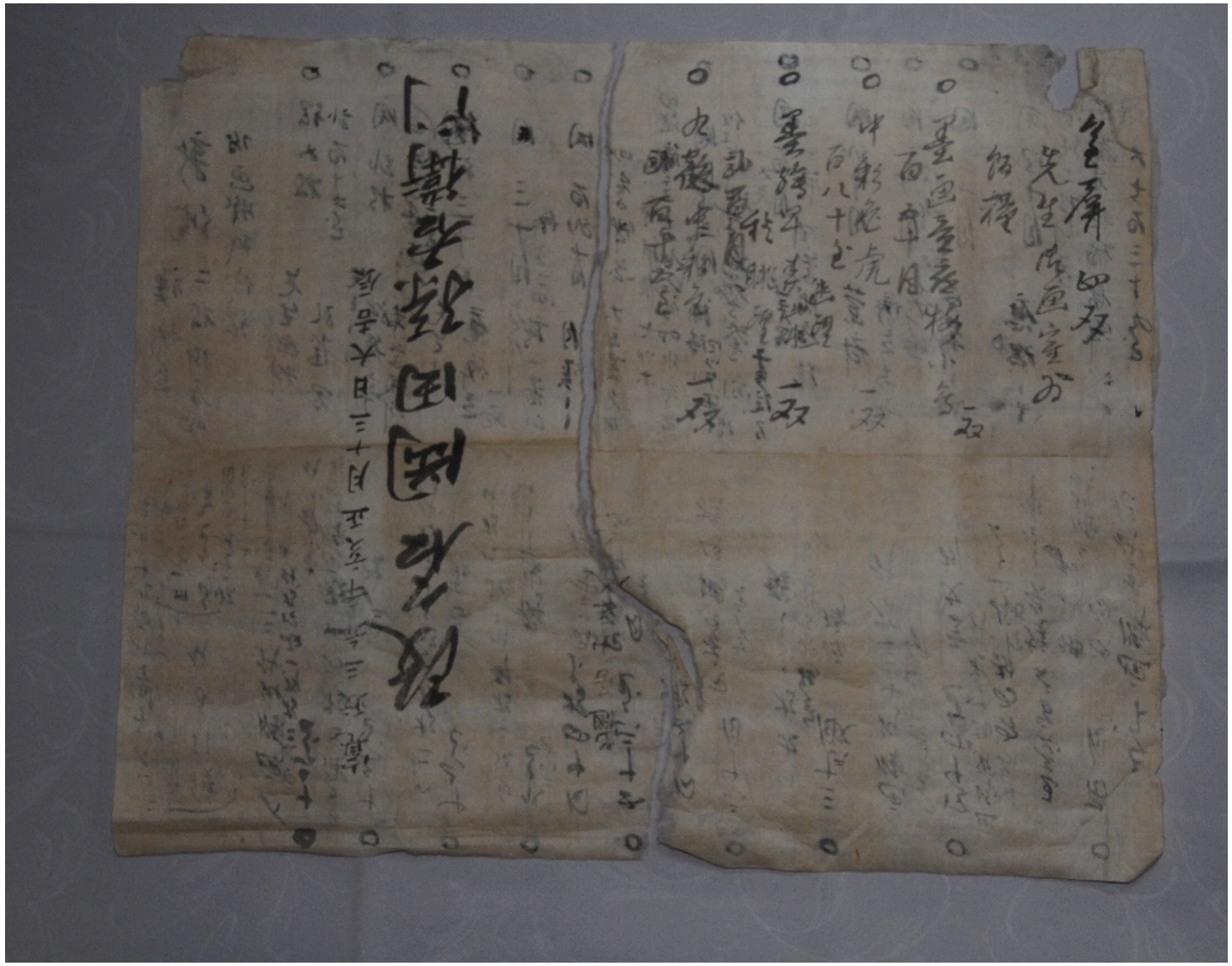
一去年秋拙寺再建之儀
願之通被　仰付就夫
於指林之内松木五拾本程
来申正月迄十二月迄
伐取ト度旨願之通
被　仰付可被下候已上

美濃郡森村大乗寺看主
天明七年丁未十二月　心城房

寺社
御奉行衆

新出資料①

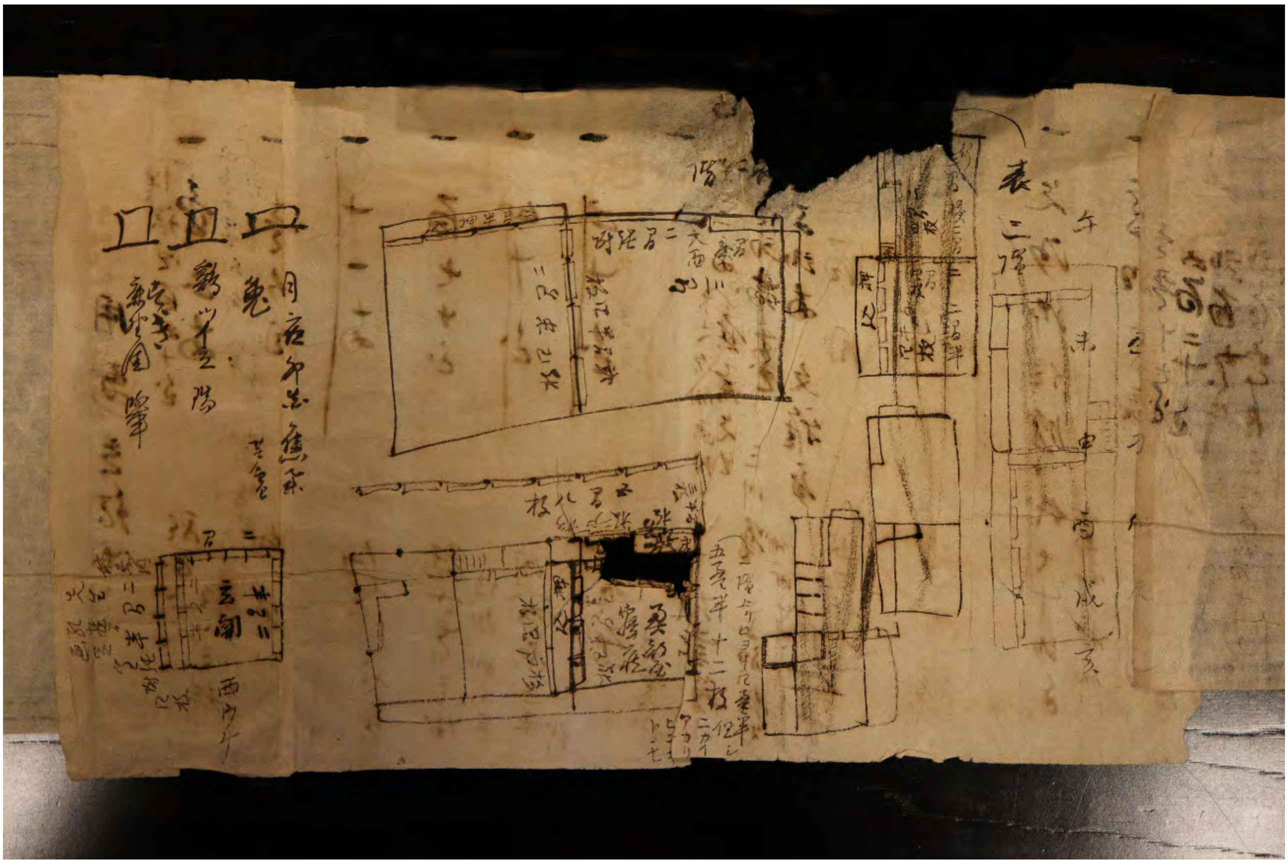
新出資料②



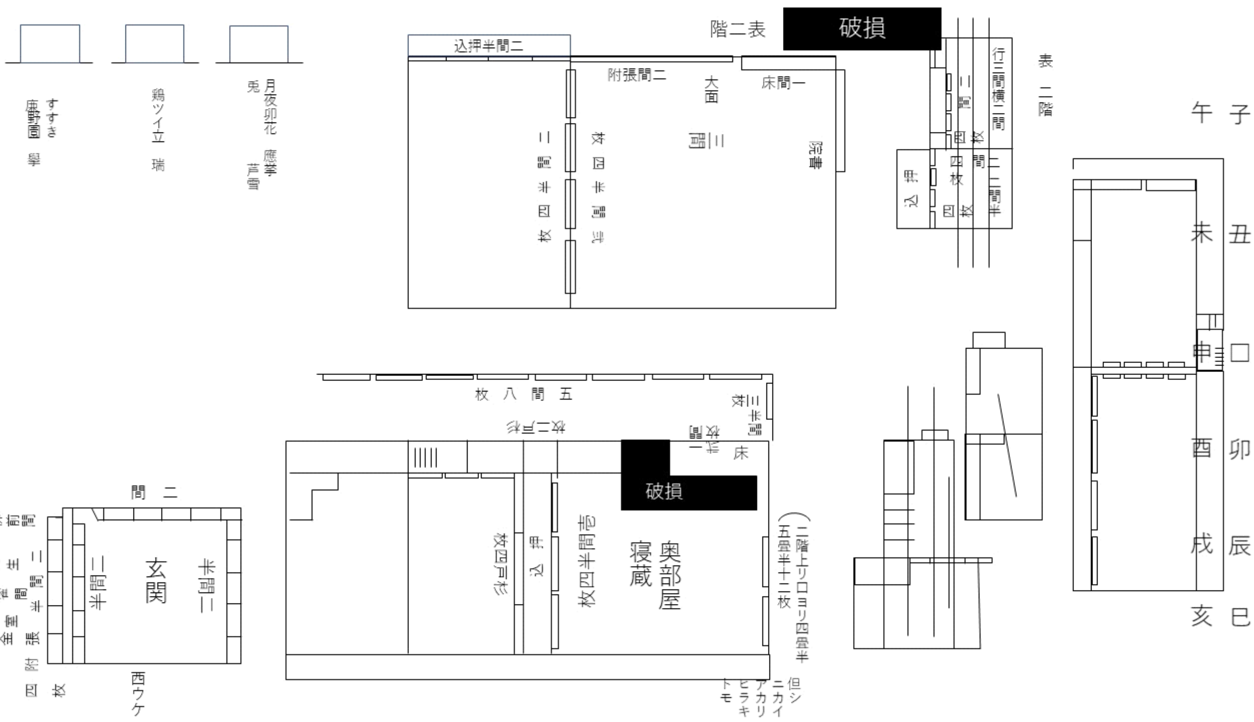
新出資料②ウラ

新出資料③

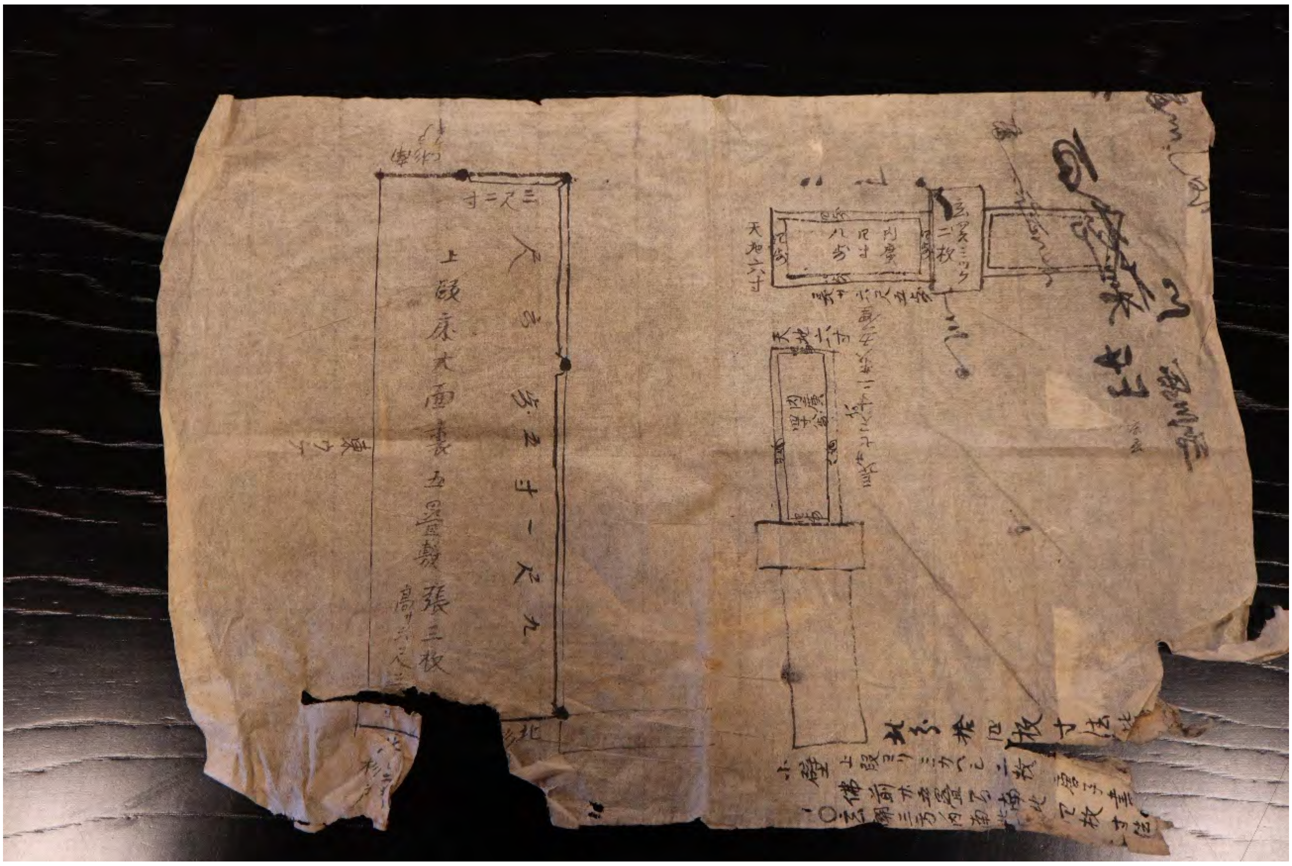
新出資料④



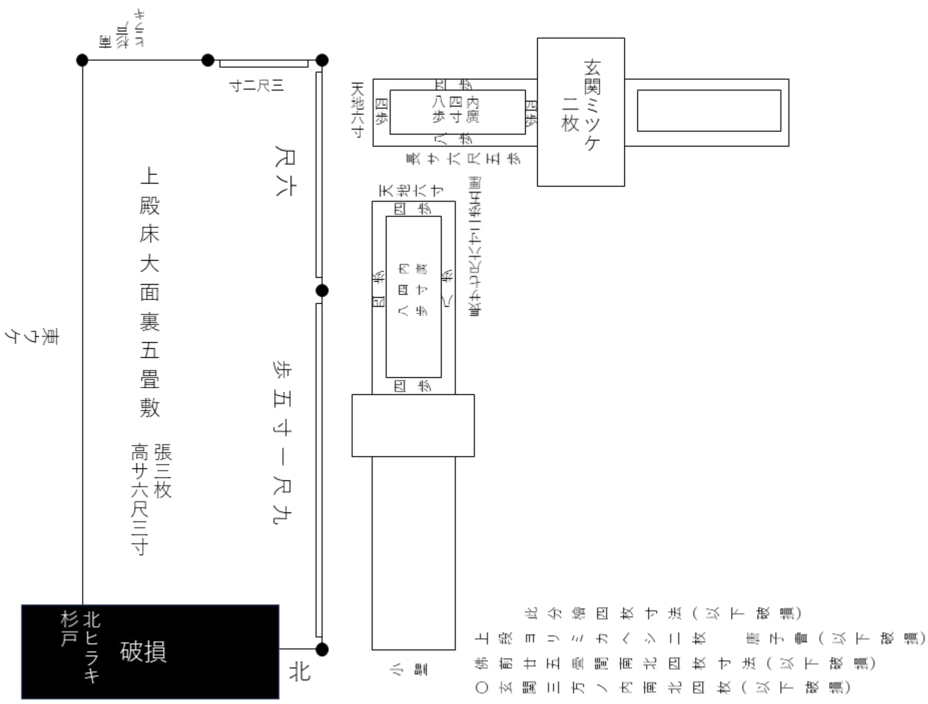
新出資料⑤



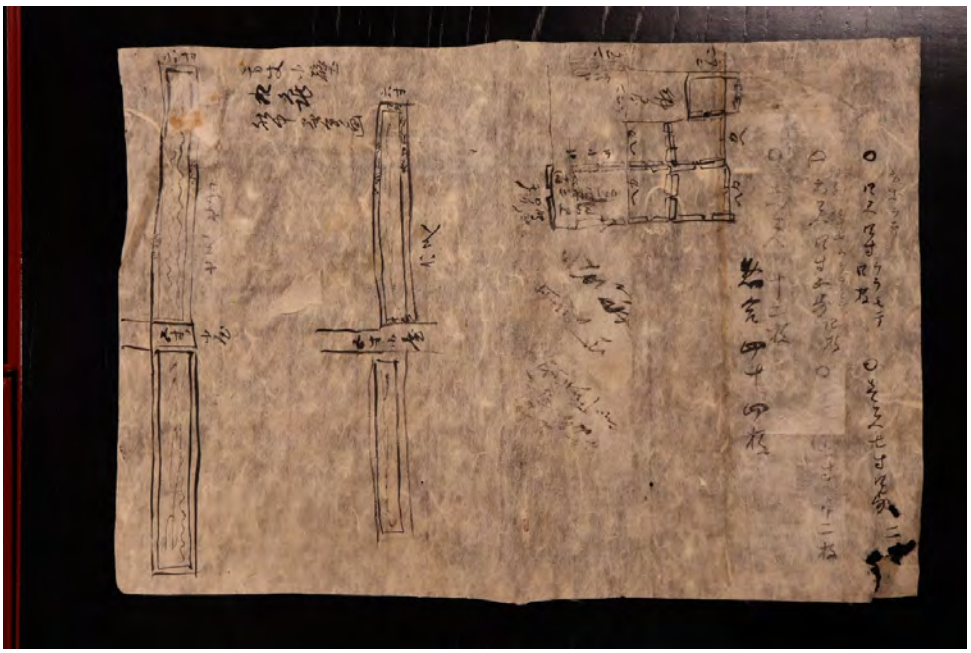
新出資料⑤ (a)・描き起こし



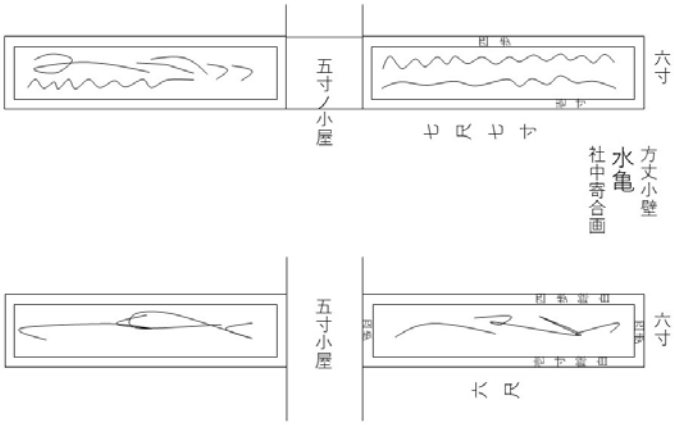
新出資料⑥



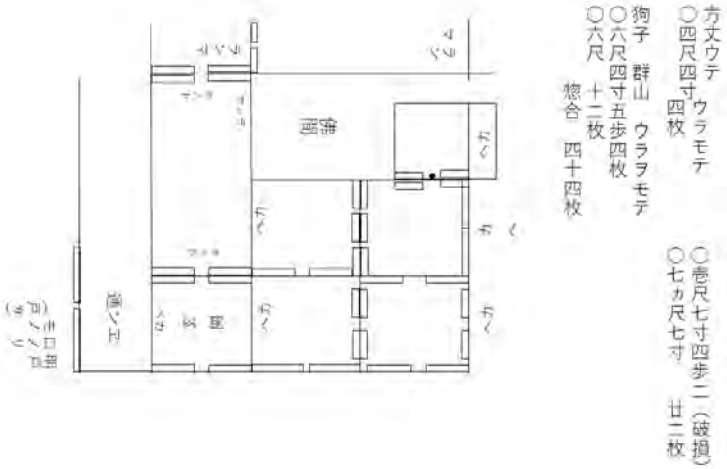
新出資料⑥ (b)・描き起こし



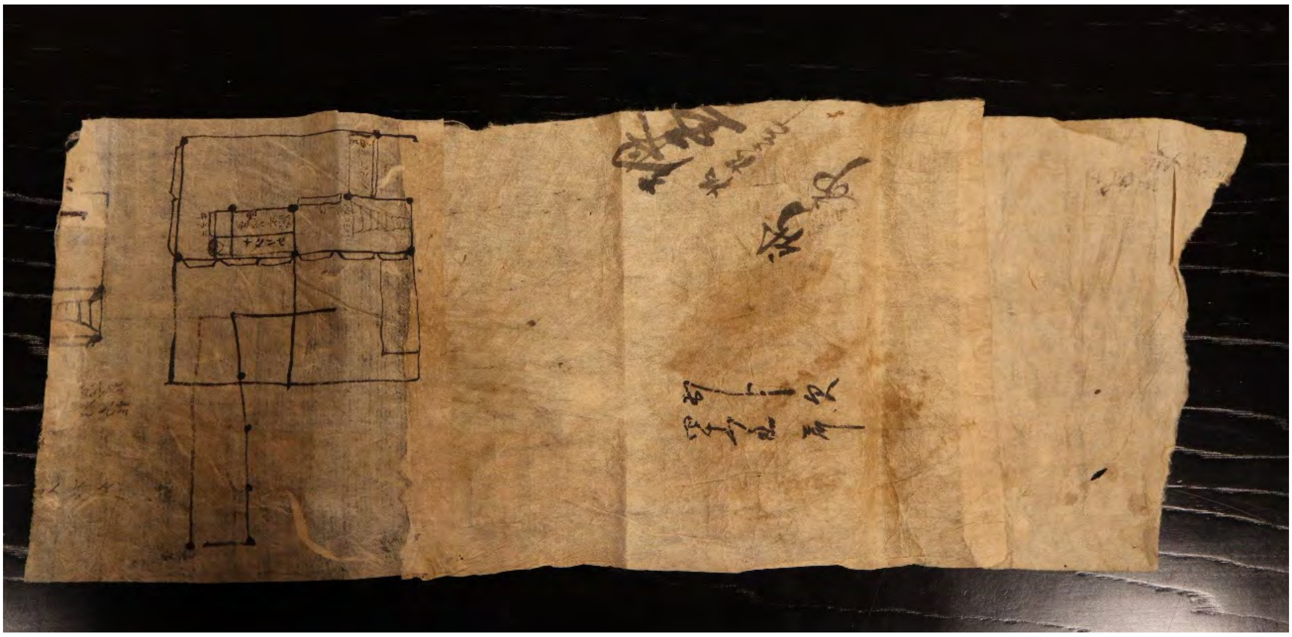
新出資料⑦



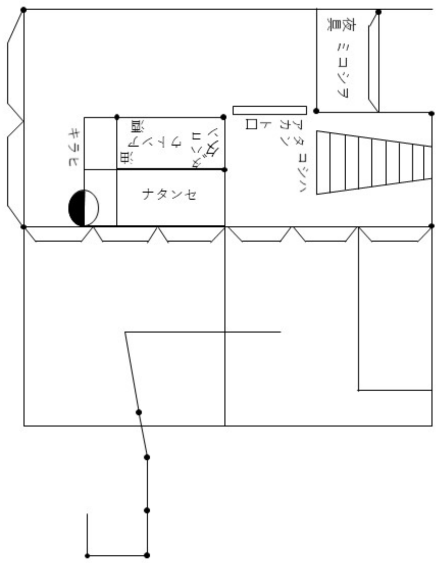
新出資料⑦ (c-1)・描き起こし



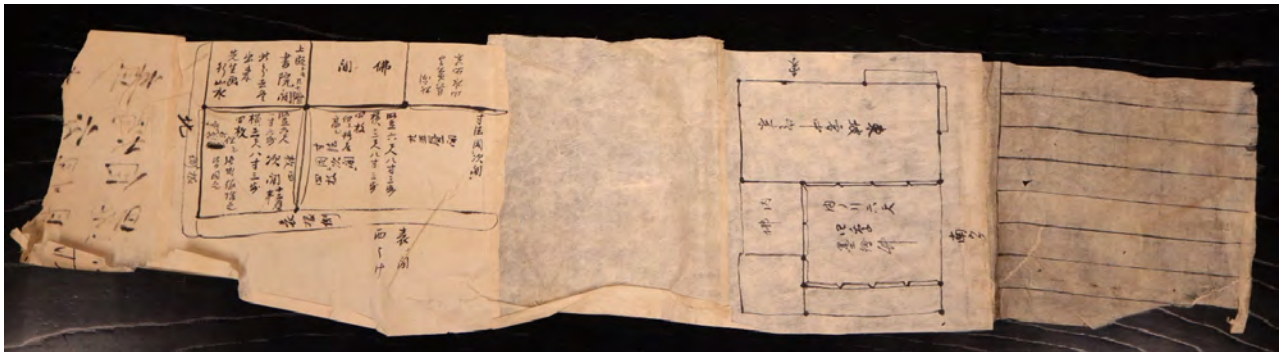
新出資料⑦ (c-2)・描き起こし



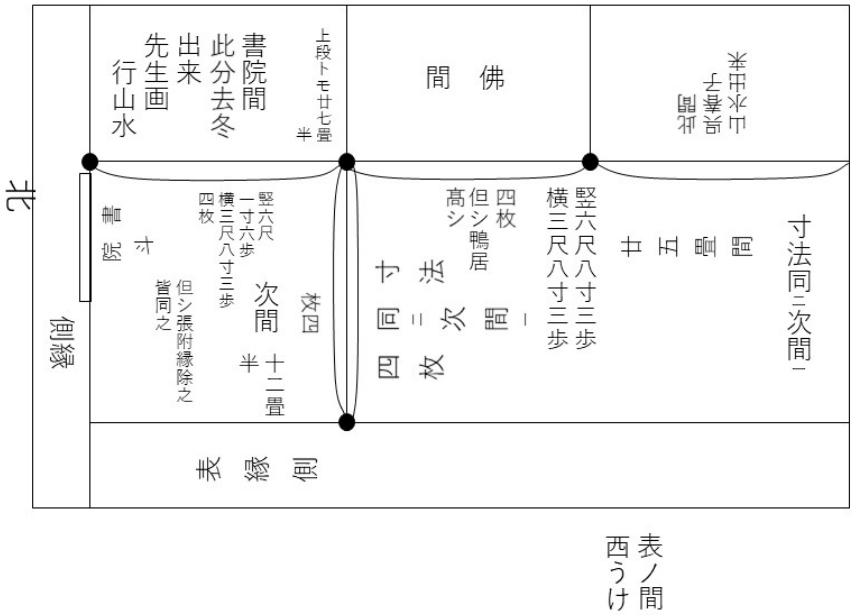
新出資料⑧



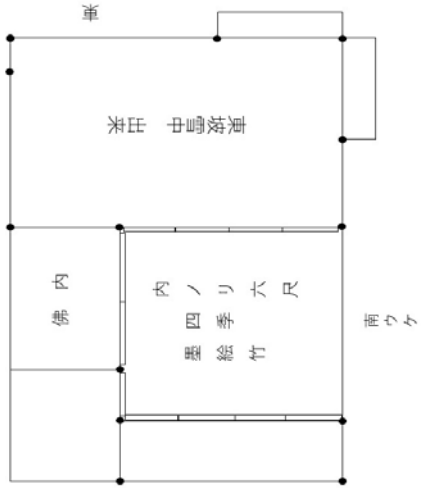
新出資料⑧・描き起こし



新出資料⑨

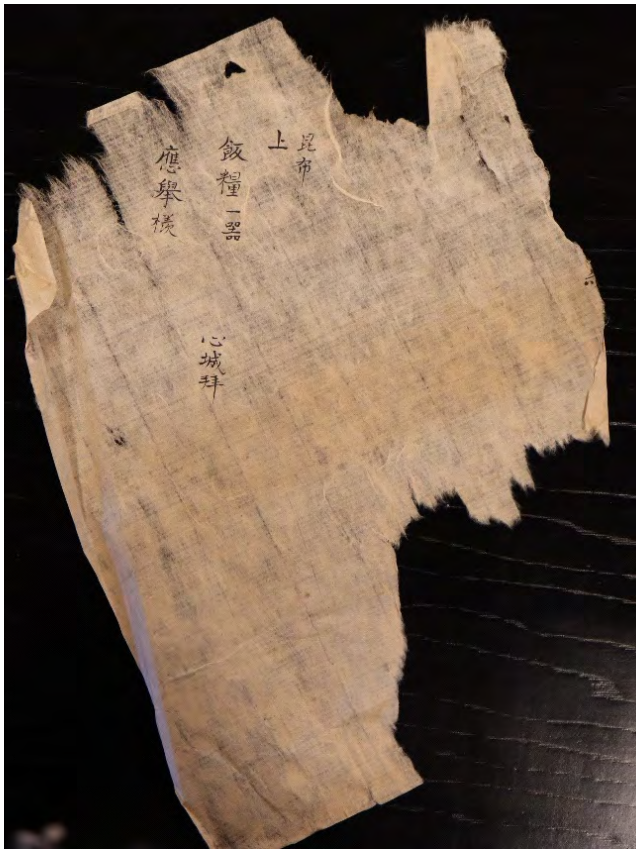


新出資料⑨ (e-1)・描き起こし



新出資料⑨ (e-2)・描き起こし

新出資料⑪



新出資料⑩

新出資料⑫

執筆者紹介

＊＊＊＊

石松　崇（香美町教育委員会事務局生涯学習課主幹）
増記隆介（神戸大学大学院人文学研究科准教授）
田中水萌（大本山石山寺学芸員）
宮﨑晴子（徳島県立近代美術館学芸員）
上嶋悟史（宮内庁三の丸尚蔵館学芸室研究員）
太田梨紗子（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程）

香美町文化財調査報告書　第三集
「大乗寺文化財調査報告書　Ⅰ」

令和二（二〇二〇）年三月

発行　香美町教育委員会
〒六六七―一三九二
兵庫県美方郡香美町村岡区村岡三九〇―一

印刷